年末に向けて、なにかとお忙しい坂井先生。それでも今回も締切にバッチリ間に合うように原稿を届けて下さいました。
前回に引き続き発達障がいのある学生への支援という所を掘り下げてお話していただいています。
本文に「電子メールを使って相談」というのが出てきますが、アスペルガーや高機能自閉の人たちには「電子メール」というコミュニケーション方法はとてもわかりやすく、理解しやすいアイテムだそうですよ。皆さんも活用してみては？！　　久田

第15回『わかるように伝えていますか』

香川大学　坂井　聡

学生相談の場では

学生相談の場は、大学においては学生相談室や保健管理センターが主に窓口になっていることが多いようです。
このような相談の場を訪れるきっかけは、次に示すような理由があります。
一点目は日頃接することが多い教職員からの紹介によるもので、もう一点が、本人からの訴えによる自主的なものです。
大学では、学年が進むに従って研究の方向が決まってくるので、少人数での授業が多くなってきます。
特に卒業論文等の指導のゼミでは、学生と指導教員との一対一でのやりとりをすることも増えてきます。このようなかで、コミュニケーションがうまく取れないことが明らかになってくるのです。その結果、指導者側は指導のしにくさを感じるようになり、同時に学生側は、理解できないことに不満をもつようになるのです。ゼミが始まった当初は、少し変わった学生だということで何とか乗り切って行けるのですが、このような状態が改善されないまま続くとすると指導を担当する教員もしびれをきらしてしまいます。いくら気が長いといっても、それだけでは理解し合うことができない状況があるということです。その結果、指導を担当する教員が、学生相談の場を学生に紹介するようになります。
また、同時に、学生相談の場に指導教員が、学生への対応等についてアドバイスをもらうために相談に訪れることもあります。学生自身が悩んでいる場合は、それを解決するために、自主的に相談に行くようにもなるのです。
学生の場合は、友人関係の問題や、他の授業での指導教員とのトラブルというのもあるようです。

このように、大学が設けている学生相談の場である学生相談室や保健管理センターが、発達障がいのある学生やそれが疑われる学生に対しても相談の場として機能しているということなのです。それゆえ、相談にあたる職員は発達障がいについての理解を進めていかなければならないということになるのです。

その一方で、新たな相談の場も増えてくるのではないかと考えられます。それは、大学における特別支援教育を専門としている研究者への相談です。私の研究室に、発達障がいが疑われる学生が相談に来る場合、それは、私が関係している「特別支援教育」に関する講義がきっかけになっている場合が多いようです。
私は、全学共通科目のなかで「特別支援教育」に関する講義を行っているのですが、その講義を聞いて相談に来る学生がいるということなのです。この講義では、発達障がいがある人の得意なこと苦手なこと、困っていることなどについても触れるようにしています。そして、この講義をとおしてそれを聞いた学生自身が、講義のなかで経験した困っている状況と、自分が困っていることについて関連させて考えたとき、その原因が発達障がいに起因するのではないかと感じて、私の研究室に直接訪ねてきたり、電子メールを使って相談をしてきたりするケースが多いということなのです。

他の大学でも、特に教育学部においては、特別支援教育に関する講義も多く開設されているはずなので、その講義を受けることで、これまで自分が困っていたことに気がつき、自分の得意なこと苦手なことを理解し、自分の特性に気がつく学生も多くなるのではないでしょうか。このようなことから、特別支援教育を専門とする研究者のところへの相談が増えるのではないかと考えられるのです。

また、最近では工学部や農学部からの相談も増えてきています。これは、発達障がいは男子に多いことが明らかになってきており男子学生の多い学部には発達障がいのある学生が在籍する率も高くなるためであるといえるのではないかと思います。

坂井聡先生の紹介

（プロフィール）
香川大学教育学部卒業 金沢大学大学院教育学研究科修了、 香川大学教育学部附属養護学校など養護学校教諭を経て、 現在香川大学教育学部障害児教育コース准教授 1997 年 自閉症のコミュニケーション指導で辻村奨励賞受賞
（著書）
暮らしの中のコミュニケーション（やまびこの里）クラスルームコミュニケーション（こころリース出版会）
自閉症や知的障害をもつ人とのコミュニケーションのための10のアイデア（エンパワメント研究所）など